

|      |  |
|------|--|
| 論題   | 神奈川県内の鎌倉街道概説―県内「京都鎌倉往還」を中心に―             |
| 著者   | 阿部正道                                     |
| 掲載誌  | 神奈川県立博物館研究報告―人文科学―<br>(神奈川県立博物館研究報告) 第7号 |
| ISSN | 0910-9730                                |
| 刊行年月 | 1977 年 (昭和 52 年) 3 月                     |
| 判型   | JIS-B5 (182mm × 257mm)                   |

# 神奈川県内の鎌倉街道概説

## — 県内「京都鎌倉往還」を中心に —

阿 部 正 道

ま え が き

関東および中部地方にかけて「鎌倉街道」と呼ばれる中世の古道が存在するが、その多くは土地の伝承にもとづくものが多い。しかし、中世の文献史料や、沿道の古社寺、城館址、板碑の分布、小字名などの地名により、これを傍証し、幾多の推定路線が成立するのである。本稿は、これまで先学により地域ごとに発表されてきたものを集成し、実地踏査を主として現況を確認し、その分布状況を考察するものである。(以下県内略図参照)

鎌倉に集中した中世古道(鎌倉街道)は、大別して次の如くなる。第1は、古代政権の所在地京都と、新興武家政権の鎌倉を結ぶ「京都鎌倉往還」第2は、信濃、上野方面より武蔵府中を経て、境川沿いに南下し、鎌倉に至る「上道」第3は、江戸方面よりの「下道」第4は、府中より多摩丘陵を貫き、鶴ヶ峯(横浜市旭区)より南下する「中道」第5は、房総方面より東京湾を横切り、金沢、三浦方面よりの「六浦道」「三浦道」などである。第6は、これら道筋以外の各武士団の居館よりの道で、多くは、上記各線に途中から合流して、鎌倉の七口(切通)に集中したのである。

上記「上、中、下」の呼称は、「太平記」(1)「梅松論」(2)によるもので、即ち、新田義貞が鎌倉討入の際、鎌倉勢が防禦のため進み出た三道を指すのである。

1 上道。<sup>かみみち</sup>「入間川(埼玉県)に向った上道の北条勢は、小手指原、久米川と打負かされ、分倍原(府中市)合戦でも破れて鎌倉に退いた。」上道は、化粧坂口より柄沢<sup>けいざわ</sup>(藤沢市)に出、境川の東岸<sup>またの</sup>を俣野、飯田、瀬谷と北上し、町田市から多摩丘陵を横切り、関戸で多摩川を渡り、府中、国分寺、所沢、入間川、管谷<sup>すがや</sup>を経て、上野、上信濃に通ずる道である。頼朝が信濃国浅間山の狩に出かけたのも、(3)この道と伝える。(4)この道は、幾多の史跡、伝承を残し、街道遺跡も多く、鎌倉街道の特色をもつ代表的な道である。

2 下道。<sup>しもみち</sup>「下道の大將金沢武蔵守貞将<sup>さだまさ</sup>は、新田軍の背後を攻める目的で、下河辺(古利根川、現、江戸川地域)に進軍したが、義貞に味方した下総の千葉貞胤などの軍と鶴見で合戦となり、破れて下道を山内(北鎌倉)に退いた。」下道は、北条執権時代に入り、鶴見川、多摩川下流などの武蔵の開拓地に通ずる道として、重要となった。(5)また、和田の乱後、北条氏は山内庄(北鎌倉より戸塚方面まで括る地域)を手に入れた(6)から、北条泰時は、巨福呂坂<sup>こぶくろ</sup>の切通しを開いた。(7)当時、將軍頼経は、鶴見の秋田城介義景の別荘に渡御している。(8)下道は、巨福呂坂より狹川<sup>いたち</sup>の新橋(戸塚区笠間十字路)に出、中道と岐れて、武相国境の丘陵の尾根道(七里堀)(9)を進み、弘明寺、保土谷、鶴見を

通り、多摩川を矢口付近で渡り、江戸を経て常総地方に通じていた。ただし、室町時代の「廻国雑記<sup>(10)</sup>」などをもとにする、下道筋の鎌倉街道がある。これは、丸子で多摩川を渡り、駒林（日吉本町）綱島、大曽根と、現在の横浜市港北区を通過して<sup>(11)</sup>保土谷に至るものである。南では、「七里堀」より西方の丘陵を通り、日限地藏（港南区）付近で中道に合するのである。

3 中道。上記の上道、下道で、その要旨を引用した「太平記」「梅松論」では、北条軍の進出地点が記されていた。そこで、今日、「鎌倉街道中道」として、元久2年(1205)畠山重忠を討つために、幕府軍が鎌倉より二俣川<sup>ふたまた</sup>（旭区）に進軍した<sup>(12)</sup>古道を称するのである。中道は、前記の独川新橋より北進し、花立の坂（戸塚区下倉田と小菅ヶ谷町との境）を上り、丘陵の尾根を一直線に北進し、上柏尾（戸塚北方）に出、<sup>(13)</sup>再び丘陵地を北上し、帷子川上流（旧二俣川の地域）を渡り、畠山重忠戦死の地と伝える鶴ヶ峯に達する。「武風」は上柏尾以北の古道を「長堀通」（長堀台）と記している。<sup>(14)</sup>

鶴ヶ峯以北は、幾筋にも「鎌倉街道」と称され、また、推定される古道がある。①町田地方で「ハヤ道」と呼ばれる道は、武蔵府中に直行する道である。これは、恩田、奈良町（緑区）広袴（町田市）を通り、関戸（多摩市）で、多摩川を渡るのである。<sup>(15)</sup>②矢の口渡方面から、弘法松（川崎市百合丘2）を経て、王禅寺西方の丘陵地を南下する道<sup>(16)</sup>③登戸渡から、枳形山付近を経て、元石川町、荏田（緑区）を通り、鶴ヶ峯に至る道<sup>(17)</sup>これは、鎌倉時代初期には、稲毛一族が鎌倉に向う道として利用されたであろう。中道の幹線を説くものに④鶴ヶ峯より長津田を経て町田で上道に合するとするもの、<sup>(18)</sup>⑤二俣川より、都岡、川和、宮前（川崎市）を経て二子の渡に出るもの、<sup>(19)</sup>これは多摩川対岸の東京都に残る鎌倉古道や、頼朝の奥州征伐に関する道筋との関連がありそうである。⑥また、二俣川より白根、川和、谷本（緑区）を通り、麻生（川崎市）を通り是政渡（府中市）に通じたとする説<sup>(20)</sup>などがあり、たやすく判断を下せない現状である。

4 京鎌倉往還。今日、「鎌倉街道」といえば、上記の三道を主要幹線として、或はこれのみを説く場合が見受けられる。しかし、鎌倉の七口に集中する諸国よりの鎌倉への道を考察して、「鎌倉街道」と呼ばなければならない。特に、京都よりの「京鎌倉往還」は、中世の「東海道」として別に取扱い、鎌倉街道からはずされがちのように思われる。実際には、この道も各地で「鎌倉街道」などと呼んでいるのである。尾張<sup>かや</sup>の荳津宿（愛知県海部郡甚目寺町）熱田、古鳴海を経て二村山<sup>ふたむら</sup>から三河に入り八橋<sup>やつはし</sup>を通り矢作の宿（岡崎市）に至る道は、同地方で「鎌倉街道」と称する<sup>(21)</sup>駿河の源太坂（吉原市）を通る道は、「鎌倉街道」と呼び、坂道には鎌倉時代のものとされる敷石（熔岩）道が残っていた。<sup>(22)</sup>本文に記す箱根の湯坂道も鎌倉街道と呼ばれている。

5 ①六浦道。上総の木更津（千葉県）に集中する鎌倉街道<sup>(23)</sup>（小字名や遺跡が現存）は、海路、六浦津に渡り、朝比奈峠を越えて鎌倉に入る。鎌倉時代に、北条氏の一族、金沢氏の支配した六浦庄（横浜市金沢区）は、その地の塩や房総の物資が集められ、戦略的にも鎌倉東方の要地であった。<sup>(24)</sup>仁治2年（1241）執権北条泰時が六浦道の朝比奈切通の開通を督励したこと<sup>(25)</sup>は、この鎌倉街道の重要性を証するものである。②三浦道、三浦半島の各地より、鎌倉の名越坂、小坪坂の口に通ずる鎌倉街道であり、これは、その諸港より房総に通じ、このルートを制する三浦一族が、鎌倉に向う道であった。

6 最後に、以上の他、本文内に記す以外の県内のおもな道をあげておくことにする。  
 ①座間入谷方面より、海老名の今泉、国分を通り南下する鎌倉街道がある。(26) その延長は、綾瀬町を通り、長後(藤沢市)を経て、上道筋の俣野に出るが、または用田(藤沢市)を経て藤沢宿に通じたものと考えられる。この道は、河原口(海老名市)の海老名氏や、早川城(綾瀬町)を中心とする渋谷一族が、利用した道であろう。この道筋には、日蓮佐渡送りの時に、片瀬刑場より依智(厚木市)の本間館に向った道としての伝承史跡およびその考察がなされ、(27) 一遍の当麻道場からの道でもあったと推定される。②秩父路。これは秩父より、妻坂、小沢の峠を越え、五日市、八王子を経て横山丘陵を越えて、本県内に入り、境川沿いに鎌倉に向う道である。(28) この道筋には、秩父党の畠山重忠にまつわる伝承が多い。③津久井道。武田信玄が小田原攻めの帰途、利用した三増峠(愛甲郡と津久井郡の境)を越える道で、俗に「信玄道」といわれる。これは、甲斐より相模川上流に沿い、三増峠を越えて上依知の猿ヶ島の渡より座間の前記の道とむすびつく(29) ようで、甲斐国よりの「鎌倉街道」である。

以上は、神奈川県内を通ずる鎌倉街道の分布の概略を記したのであるが、具体的な調査の記述は、本稿では余裕がないので省略した。今回は、県内の京鎌倉往還筋のみに留めたが、他の道筋については、その一部を、写真(①~②⑤)により補った次第である。

注 [一]

- 1 「太平記」(日本古典文学大系34, 岩波1960) 卷10 鎌倉合戦事, 卷31(同大系) 小手差原戦
- 2 「梅松論」(群書類従卷371 続群書類従完成会 1929)
- 3 「吾妻鏡」(吉川本 国書刊行会 1915, 新訂増補 国史大系 吉川弘文館 1965以下同)  
建久4年(1193)3月21日条
- 4 「妙本寺本曾我物語」(貴重古典籍叢刊3 角川, 1969) 卷5
- 5 「吾妻鏡」承元元年(1207)3月20日, 延応元年(1239)2月14日各条
- 6 同上 建保元年(1213)5月7日条
- 7 同上 仁治元年(1240)10月20日条
- 8 同上 仁治2年(1241)11月4日条
- 9 「新編武蔵国風土記稿」(大日本地誌大系雄山閣) 以下(武風)と略す  
卷80久良岐郡久保, 松本, 吉原, 金井の諸村の条
- 10 准后道興「廻国雜記」文明18年(1486)有朋堂文庫(日記紀行集)1931
- 11 港北区師岡町熊野神社石川武靖宮司談
- 12 「吾妻鏡」元久2年6月22日条
- 13 ① 佐藤善次郎「神奈川県を通ずる東海道の今昔」(神奈川県高女校友会誌「花と実」1936)  
② 佐藤善次郎「室町時代以前の県下交通史」神奈川県実業教育振興会 1939
- 14 ① (武風) 都築郡二俣川村条  
② 高橋源一郎「鎌倉古街道」(「武蔵野歴史地理」第4冊 武蔵野歴史地理学会 1932)
- 15 下村栄安「鎌倉古道概観一町田地方に中心を置いて一」(「武蔵野」284号, 武蔵野文化協会 1973)

- 16 川崎市多摩区王禅寺琴平神社 志村文雄宮司談
- 17 戸倉英太郎「古道のほとり—都築の丘に拾ふ—」（さつき叢書 1957）
- 18 （前掲14, 17） 高橋, 戸倉説
- 19 石野瑛「神奈川大観 2, 横浜, 川崎」（武相学園 1953）
- 20 （前掲13） 佐藤説
- 21 「知立町誌」（P193~195） 1926
- 22 松尾四郎編「史話と伝説」（富士山麓の巻 松尾書店 1958） P.340〔吉原, 鎌倉街道の跡, 源太坂（上和田町）〕
- 23 小熊吉蔵「西上総に於ける古街道と国府郡家所在地の関係」（史蹟名勝天然記念物第7集 第4号 1932）
- 24 阿部正道「鎌倉の古道」（鎌倉国宝館論集 2, 鎌倉市教育委員会 1958） P.51~59
- 25 「吾妻鏡」仁治2年（1241）4月5日条
- 26 ① 座間市座間神社 山本良雄宮司談  
② 「郷土の史料」海老名町教育委員会 1970  
③ 「座間むかしむかし」座間市教育委員会 1974  
④ 「藤沢市史」4（通史篇） 1972  
⑤ 飯島忠雄「府中街道」県央史談 11号 1973
- 27 ① 「厚木交通物語」県央史談会 1971  
② 「鎌倉と日蓮大聖人」（鎌倉遺跡研究会 新人物往来社 1976）平田正信「竜ノ口から依知へ」
- 28 清水睦敬「鎌倉古道秩父道」（前掲15, 武蔵野 284号）
- 29 中村昌治「北相模の鎌倉街道」（前掲26—⑤県央史談11号）

## 「京鎌倉往還」に沿うて

この道は、二大政権所在地を結ぶ重要な街道であったから、源頼朝は文治元年（1185）平氏を討滅するや、同年駅路の法を設定した（1）以後、建暦元年（1211）頃までに新宿の増加がなされ、駅制が完備した。（2）応仁2年（1468）の「自京都至鎌倉宿次第」（3）には、63宿が記されている。本県内では、葦河（箱根町）、湯本、小田原、酒匂、郡水（国府津）、志保見（二宮町）平塚、懐島（茅ヶ崎）、鎌倉と記される。これは、箱根路コースであり、古代よりの足柄路の利用が衰えた事を示している。足柄、箱根両路の合流点の酒匂宿は、鎌倉時代には、鎌倉入前夜の宿泊地として栄えた所である（後述）。室町時代となり、大森氏、北条氏の城下町として小田原が栄えるに至って、酒匂はその役割を小田原に奪われたのである。上記、「宿次第」にみえる藤沢宿も大森氏抬頭の契機となった上杉禅秀の乱後、遊行寺の敵味方供養塔建立頃から門前町として発展した、北条早雲の玉縄（鎌倉市）築城〔永正9年（1512）〕以後、小田原、鎌倉間の伝馬宿（4）としてその大鋸の地が发展し、南方八松原の辻堂経由、片瀬、鎌倉コースの主体を奪った。（5）鎌倉時代には、国府津宿泊の記録が少いが、奈良西大寺の僧叡尊は、弘長2年（1262）東下の時、2月26日「粉水」（国府津）に宿し、翌日鎌倉に入っている。（6）

### （1）箱根湯坂道（芦川より湯本まで）

〔芦川宿〕は、近世箱根宿の前身であった事は、中世の紀行文「春能<sup>はるのみやまじ</sup>深山路（7）および「名所方角抄」（8）で芦ノ湖南岸と知られ、また、箱根宿の小字に芦川町の名を残している。（芦川は、鞍掛山より芦ノ湖にそそぐ細流である。）（9）康暦2年（1380）当所に関所を構え、円覚寺造営料として3年間関銭を徴取した。（10）

〔芦ノ湯〕二子山の西麓の鎌倉時代の石仏群（俗称二十五菩薩または元賽の河原）前を過ぎれば「あしのうみのゆ」（春能深山路）となる。東関紀行（11）に、「山のなかに至りて湖広く湛へたり、箱根<sup>はこね</sup>の湖と名づく。また芦ノ湖といふもあり」とあり、前者が現在の「芦ノ湖」で、後者は、芦ノ湯に「阿字池」としてその一部を残している。この池の東方朝日岳の丘陵（A）から、旧石器時代の遺跡が発見されたが、その発見の端緒は、丘陵の尾根を東西方向にU字型に堀穿して延びている旧鎌倉街道の北側断面より、若干の石器と石片が採集された事であった。（12）この延長の鷹の巣、浅間山の尾根道は、現在ハイキングコースに利用されている。（B）しかし、電話ケーブルの埋設や、路面の補修などで面影を失い、古道は、現在の道に重複または平行するなどして、草むらの中に所々くぼんだまま残存する状況である。（13）

小田原の北条氏は、鷹の巣城および湯坂城（湯本背後の城山）を築き、この道の守りとした。（14）城山より早川の谷に下る急坂が「湯坂」で、鎌倉時代、阿仏尼の紀行「十六夜日記」（15）でその状況が知られ、その名は「吾妻鏡」（16）「曾我物語」（17）などにも記されている。湯本背後の湯坂には、古い敷石と見られるものが多く、前記諸城の工事と関連したものかと思われる。或は、天正9年（1581）北条氏政が、湯本から伊豆三島までの道路を修築させた（18）時かもしれぬ。しかしこれは、近世東海道となった須雲川沿いの畑宿経由の道の工事とも考えられる。（19）

## (2) 湯本宿より酒匂宿および足柄路

東関紀行の作者が湯本に宿泊した記事や、<sup>(20)</sup> 准后道興が風祭より舟で湯本に渡った事などから、早川の水量が豊富であった事が知れる。<sup>(21)</sup>

平安紀行にみえる板橋(小田原市西端)<sup>(22)</sup>の居木神社(水神)には鎌倉時代の板碑<sup>(23)</sup>があり、風祭より早川尻に向う古道が通っていた事がうかがわれる。相風に、「東海道の大路、古は東隣山王原村の浜辺より古新宿町に係り、海浜を通じ早川村に至りしとなり」<sup>(24)</sup>とある。これは、早川尻の平成輔の墓<sup>(25)</sup>(小田原市南町3)付近より海浜を古新宿(同市浜町4)に通じたものであろう。

小田原宿関係史料としては、室町時代、康安元年(1361)鎌倉公方足利基氏<sup>もとうじ</sup>の勘気を受けた畠山国清が伊豆に落ちる時の宿泊、<sup>(26)</sup> 上杉禅秀の乱〔応永23年(1416)〕足利持氏小田原宿泊、<sup>(27)</sup> (此時に持氏は大森頼春に援助され禅秀軍を箱根で翌年破る。)<sup>(28)</sup> 永享4年(1432)持氏は小田原城主大森頼春をして、鎌倉の鶴岡八幡宮の修理料として小田原関を設け、関銭を3ヶ年徴収。<sup>(29)</sup> (此頃、鎌倉大蔵稻荷修理料として湯本関も設けられた。)<sup>(30)</sup> などと顕著になる。

〔酒匂宿〕小田原の古新宿よりは、御霊八幡宮北から酒匂川を渡り、酒匂の八木下あたりに出た。<sup>(31)</sup> 源平盛衰記は、石橋山合戦に向う三浦勢が「酒匂宿西方八木下に陣をとる」と記す。<sup>(32)</sup>

吾妻鏡に記す酒匂宿泊を次に列挙しよう。

①文治元年(1185)5/15平宗盛、源義経。②建久元年(1190)10/4頼朝上洛。③同下向同年12/28。④暦仁1年(1238)1/28頼朝上洛。⑤同年10/28同下向浜部御所(以上足柄路)。⑥文応元年(1260)12/2宗尊親王、二所詣帰途。⑦弘長3年(1263)5/1同、浜部駅(酒匂)などである。酒匂西方に「御所蹟」(八幡宮前)小名「はんべ」などの称があった。<sup>(33)</sup>

弘安3年(1280)11/25、飛鳥井雅有は、酒匂宿の遊女たちの有様を「春能深山路」に記している。日蓮は文永11年(1274)身延入山の時に酒匂に5/12、翌13日、足柄峠を越え竹下に泊した。<sup>(34)</sup> 済度山法船寺はその宿泊地と伝える。<sup>(35)</sup> また、南蔵寺は吾妻鏡に記す福田寺(政子安産祈願寺)<sup>(36)</sup>の後身で、旧地は国道の南側海辺に在ったと伝える<sup>(37)</sup> 大見寺内には徳治3年(1308)の塔が有り此付近は酒匂宿の中心であったと考える。

〔足柄路〕(酒匂一関本一足柄峠)

酒匂より足柄への道は、まず酒匂川の氾濫原を北上するが、流路の変遷もあり、古道をもとめるのは困難である。しかし、文献にみる中世の古村や伝承地点を結び次の線が出てくる。酒匂—鴨宮<sup>(38)</sup>—一成田—桑原<sup>(39)</sup>—小台—塚原または、鴨宮—飯泉<sup>(40)</sup>—飯田岡<sup>(41)</sup>—小台。東方の曽我より来る足柄路と桑原で合する。塚原(南足柄市)の南隣岩原城(C)<sup>(42)</sup>は(足柄、浜居場、春日山と並び足柄路を守る小田原の支城として)大森氏築城であるが桑原(D)飯田岡、小田原より来る三路の合流点のおさえの位置にある。

塚原よりは酒匂川支流の狩川に沿って関本宿(南足柄市)に至り、荻野、矢倉沢の尾根、または中腹を西進して足柄峠に達したとみられる。関本の加藤誠夫氏は、「藤原範茂の墓のある丘(仮称亀ヶ尾丘陵)から発足して、足柄神社<sup>(43)</sup>の丘上を通り、「象が入」の北から281.2mの山の南辺をかすめて、関場の小学校の付近に出、366mの南の肩で、今の峠道を横切り、高杉山の尾根づたいに足柄山の828.5mの所に出た」とされる<sup>(44)</sup> 足柄路

のコースは他に異説も数多あり、また、古代官道としての足柄路関係もあるが、省略する。海道記の著者は、貞応2年(1223)4月16日竹の下(藍沢<sup>あいざわ</sup>の宿)を立ち足柄峠を越え、関本<sup>せきもと</sup>に至り、「関下の宿をすぐれば、宅をならぶる住民は人をやどして主とし、窓にうたふ君女<sup>きみ</sup>は客をとどめて夫とす」と、鎌倉時代の同宿の盛況を描き、その夜は酒匂に宿している。(45)足柄峠西麓の駿河竹の下(藍沢宿)は、信濃より甲斐を経て足柄峠に向う鎌倉海道(46)が通じ、黄瀬川宿で箱根路と岐れて北上する足柄路との合流点であった。

室町時代以来、箱根路が栄え、足柄路は地方道の性格となったが、小田原よりの甲州路としての役割を持っていたのである。

### (3) 二宮地区(海辺の道と山手の道)

〔梅沢〕江戸時代東海道の立場茶屋として栄えた梅沢の和田本陣は、押切坂上の「越場<sup>こし</sup>」の地であるが、(47)室町時代の「廻国雑記」に記される梅沢の里は、「元梅沢」(国鉄二宮駅付近)の地であろう。「樸沢志<sup>ウメザワ</sup>」(48)に国府津村より大磯宿辺までの古道があり、土地の人は裏道と称するが、これは「古幕府」(鎌倉幕府か)御上洛の時の要路であったという。その経路は、「川勾村雲雀田より坂を昇り、稲荷森、萩原出土に至り、上原を経て根下十王川の橋を渡り、神明下、川原新田等ノ畑中ヲ経テ、二宮村取井戸ニ通ズ」と記すこれは、西方押切川を渡り前記押切坂を上り、現在の国道に沿い東光寺(等覚院)付近を経ることが概略わかる。

#### 〔曾我一中村二宮の古道〕(山手の道)

梅沢を通過する海辺の道に対し、川勾神社(延喜式内社相模二ノ宮)前を通る山手の道があった。これは、曾我、中村、二宮の各武士の居館を結んで居り、さらに、松田、川村などの西湘北部の武士団が鎌倉に向った鎌倉往還であった。この道は、曾我十郎祐成が大磯の虎御前のもとに通った道であると伝えている。その径路は、川勾神社前(G)から、釜野獅子岩を通り(H)、吾妻神社裏側(I)を知足寺前(兄弟の姉花月尼の嫁す二宮氏の館があった)に抜け、園芸試験場の南から、峰岸岩山にかかり、秋葉神社の所から、石神台、六所神社前の道を馬で通った(49)といわれる。「曾我物語」は、建久4年(1193)5月、富士の仇討に出発する時に、十郎は五月雨の中を大磯より虎御前と、中村通を過ぎ、曾我と中村境の山彦山(六本松)まで来て、虎と最後の別れをしたと物語っている。(50)

山彦山(現、曾我山)の峠を六本松(昔六本松があった)(E)と呼ぶ。西方曾我別所より、観音沢に沿いこの峠に至り、北方大山に向う道は近世小田原方面よりの「六本松通り大山道」と呼ばれた。北方曾我原の曾我城址より剣沢を上り、城前寺旧地(51)付近を経て峠に至る道は、西方は酒匂平野の桑原より、酒匂川を渡り足柄峠に通じる道とむすびつくのではないかと考える。文明18年(1486)、准后道興が足柄峠より鞠子川<sup>まりこ</sup>(酒匂川)を渡り剣沢より山彦山を越え、大山寺に至った(52)道はこれであろう。

文治元年(1185)頼朝は、京都の義経を討つために、鎌倉を発し、10月29日夜、中村庄に宿し、翌月1日に黄瀬河駅に着いたが、義経等の都落ちの報を聞き鎌倉に引上げた。これより先、治承4年(1180)富士川の合戦の時には、10月16日夜六所宮(大磯町国府新宿)泊、18日足柄を越え、その夜黄瀬川に到着している。(53)故石野英氏は、「17日の宿所は吾妻鏡に明記してないが、恐らく中村庄司宅に泊」と推定される。また、中村庄司の当時

の居館址を、竹見竜雄氏（小竹住）所蔵の江戸時代の検地帖にみえる小字名にもとづき、現地調査（昭和13年頃）により、小竹（小田原市）の殿窪（鳥ヶ久保）の地とされた。この館址の位置により、曾我に通じる古道は、「国府本郷より、吾妻村（二宮町山西）に至り、川勾神社の社前を過ぎ、本村に入り、中村川の左岸（東）に沿い、上ノ久保、道場、別堀を経、池上屋敷を通り、川を渡って鳥ヶ久保および脇の近くを過ぎ明沢、沼代を経て六本松より峠を越えて曾我村に入った」と推定されている。（54）

しかし、六本松より川勾神社前への直路をもとむれば、沼代の王子神社付近より、東南に、小船を経て道場山の南で中村川を渡る道筋としたい。この中村川流域では、永正2年（1505）頃から扇谷上杉方と小田原の北条早雲勢が丘陵上の諸城に拠り滞陣し、同9年に早雲が岡崎城の三浦満寸を破るまで続いたと伝える。道場山（二宮町山西）の城はその一つで、六本松に通じる足柄道、川勾神社前に通ずる鎌倉道、押切方面より小田原に至る箱根道の三叉路をおさえていた。（55）

西方の曾我城は、永禄2年（1559）北条氏康の勢に攻められ落城したのである。（56）〔二宮六月関〕永禄2年の北条氏印判状に、大磯の地福寺の客殿修理料として、関銭を取った事がみえる。（57）この関所の位置は、大磯町国府新宿西方の変電所の西方の二宮の内と推定されている。（58）

#### （4）大磯地区

##### 〔小磯の新楽寺（廃寺）と古道〕

吾妻鏡、建久3年（1192）8月9日条に、頼朝の妻、政子の安産祈願を相模国諸社寺に行はしめ、その27社寺の名と場所が記されている。此時に誕生したのが源実朝であった。この京鎌倉往還筋では、西より、「大箱根（箱根神社）、賀茂（加茂神社）柳下（八木下）、福田寺 酒匂、二宮 河勾大明神（川勾神社）、惣社 柳田（六所神社、国府新宿）新楽寺 小磯、高麗寺 大磯、黒部宮 平塚、範隆寺 平塚」と記されている。西小磯の金竜寺門前の道は（J）「鎌倉街道」と呼ばれている。（59）この寺域西方にある観音堂は、もと、寺の北方の字観音谷（K）にあり、その別当が吾妻鏡にみえる新楽寺であったという。（60）現在、観音谷釜久保の洞窟中に観音の石像が安置されて、土地の人々に供養されている。（相風）大磯宿条（61）に、「土人伝へて今、村の北方字駒留橋（L）（化粧坂東口）辺より、凡そ2町許り西に入り、宿裏直道にて愛宕御林裏通り、東小磯妙大寺および御岳社前通り（国鉄大磯駅西北）字池ノ下立野より西小磯村に通ずる野道あり、是古海道の道なりと云、是非詳ならず」とあり西小磯の条で、「伝へ云、村内切通（旧東海道が西小磯より国府本郷に入る道）開けざる己前は、北の方、字賀神森の後通り、山に添って往還せしと云。今、野道あり、則ち大磯宿の条にも弁ぜし古海道是なり。」と記す。上記古道は、高麗より国鉄線北側を、大磯丘陵の山麓線を西進し、西小磯の金竜寺前に通じ、その西の延長は六所布社前より二宮関址を経て、梅沢に達したものと考えられる。東の高麗寺の地藏堂（現在慶覚院）内には建治4年（1278）の銘を持つ鎌倉時代の地藏坐像がある。（62）

〔土屋氏の鎌倉への道〕土屋（平塚市）の小字琵琶から杜鵑山の丘陵を越え、大磯町黒岩に向う路は、土屋から大磯を経て鎌倉に向う道であったので「鎌倉みち」とも呼ばれている「行こか鎌倉、戻るか土屋、思ひみだるる杜鵑山、いまでも血に鳴くほととぎす」の古謡は、建保元年（1213）5月の和田の乱当時、土屋次郎義清は、和田義盛より応援を頼まれ

悩んだが遂に味方に加わり戦死した事を伝え残したという。(O)(63) 黒岩よりは虫窪を経て、六所神社北方より国府本郷に至ったのであろう。

### (5) 平塚地区

〔平塚本宿〕前掲(4)吾妻鏡に記す黒部宮は、建久2年(1191)頼朝勧請と伝え、範隆寺はその別当で、海浜に下る十軒坂周辺(M)に、門前集落があったと伝える。この坂の途中東側に現在黒部宮址があり、小祠を祀る。(平塚市黒部丘)この地は、高潮の被害により、集落は北方に移り平塚本宿となり、黒部宮は鎮守の春日神社、(N) 範隆寺は広蔵寺となったという。春日神社の祭礼で、神輿は旧地黒部宮に渡御するのである。(64)

平塚では、旧東海道と国鉄線との間を東西に通ずる細道がある。これを「興道と呼び大磯の国府祭の時に、相模一宮の寒川神社と、平塚八幡宮の神輿とが国府本郷に向う道である。現在、この道の東部は市街化により辿る事が困難であるが、西部では、平塚本宿の時宗教善寺前に出る道(P)で近世以前の東海道であり、同寺は一遍の庵住の地と伝えられている。(65)

平塚海岸の砂丘地帯は、「唐<sup>もろこし</sup>ヶ原<sup>はら</sup>」(66)と呼ばれて知られており、平安末期より鎌倉初期にかけて南部の海辺地区を道が通じ、その後、北方に移ったのではないかと、上記のことなどから推定するものである。

〔田村道と奥州古道〕平塚本宿柳町の北方(平塚市平塚)に「ごりようさん」(Q)と呼ぶ塚が二つ並んでいた。(67)現在、シベの大木の下に御霊宮がある。もと、この塚のほとりを東海道より岐れ東北に向う奥州古道があった。貝原益軒篤信は「吾妻道ノ記」で、「平塚、昔はここより奥州へ通ぜしと云」(68)と記している。

この古道は、江戸時代の絵図によると、平塚市立野町付近を東北進し、八幡の「フタツヤ」の古道に通じていた。(69)フタツヤには、嘉永3年(1850)建立の「右大磯道、左八まんみち」と記した道標がある。この道筋を、大磯では「田村道」「八王子道」などと呼び田村を経ていたことがわかる。

吾妻鏡、文治4年(1188)6月11日条に、奥州の藤原泰衡より京都への貢物が大磯駅に到着した事が見え、「義経記」では奥州に居た源義経が兄頼朝の軍に参加するために、武蔵府中を経て平塚に出たと伝える。(70)(その後、黄瀬川宿で兄との対面となる)田村渡以東の奥州古道の考察についてはここでは省略する。

### 〔田村大道〕

曾我物語に「田村大道」の名称がみえる。建久4年5月、曾我兄弟が富士の狩野に仇討に出発する時に、曾我の里より西に向い、桑原<sup>たなほ</sup>の田畝に打出て、「田村大道」(後世の小田原道か)に出た。そこより十郎は足柄路を望んだが、五郎の望む箱根路を選んだのである。この田村大道は、小田原<sup>ふた</sup>から、大井、秦野、伊勢原を経て、田村の渡(現、神川橋のそば)から一ノ宮を過ぎ、二ツ谷(藤沢市)で、近世東海道を横切り、辻堂を経て、片瀬、鎌倉に向う鎌倉古道であった。(71)四ツ谷より、逆に伊勢原に向う道を近世に「大山道」と呼んでいる。相模川西岸の交通の要地、田村には、鎌倉初期に有力御家人の一、三浦義村の館があり、將軍の渡御も行われた。(72)対岸の一ノ宮は梶原景時が居館を構えた所である。(73)

〔平塚市<sup>マトイ</sup>の鎌倉街道〕

平塚市の西北、南原の諏訪神社前より、(R)花水川の南原土手を経、<sup>トモジ</sup>經の友牛(朝氏)の薬王寺前を過ぎ、新幹線を横切り、<sup>グソ</sup>公所の小字「鎌倉道」を西進し堀ノ内までを「鎌倉大繩」と呼ぶ。(74)薬王寺には、この地の開拓領主の新田朝氏(義貞の父)の墓と伝える鎌倉期の古塔(S)がある。この公所の田地は、寿永3年(1184)頼朝が鶴岡八幡宮の相撲式に与えた坂間郷の地である。(75)「大野誌」は、「南原以西は今に鎌倉街道とも呼ばれ曾屋(秦野市)から足柄峠に通ずるが、南原以東は、恐らく旧相模川に架せられた橋に通ずるのだろう」と記す。(76)平塚八幡宮(平塚新宿)の東方、宮松町を東西に貫く道があり、相模川に向う。これを鎌倉道と称する。(77)方向よりみて、南原よりの鎌倉街道に連なるものかと考える。

(6) 茅ヶ崎地区

〔懷島宿と古相模川の橋脚〕

建久元年(1190)11月29日、頼朝は鎌倉を発し、上洛の途につき、その夜懷島に宿し、大庭景能(懷島円蔵に居館を構え、懷島氏を称す)の饗応を受けた。(78)吉田東伍大日本地名辞書では、懷島は相模川渡津の水駅で、今の今宿、町屋の大字は其遺名であろうと記す。

旧東海道の下町屋と今宿の間を流れる小出川の橋(国道1号)の南、(小出川の堤の東側下)の池の中に、檜の古杭が露出している。(T)大正14年(1925)1月に発見されたが、これは、大正12年9月1日および同13年1月15日の地震によるものとされ、水田に11本最初露出し、その後7本となった。沼田頼輔氏などの調査で、鎌倉時代の相模川の橋脚と推定されている。(79)吾妻鏡の建暦2年(1212)2月28日条に、建久9年(1198)稲毛重成が架橋した相模川の橋が朽ちたので、顛倒する前に早く修理をするように將軍実朝が命じた事が記されている。また、その理由の一として、「二所御参詣要路」とあり、頼朝以来將軍の二所詣(箱根、伊豆の両権現および三島)が度々行われ、頼朝が文治4年(1188)正月20日参詣の時には、浮橋が設けられた。

〔茅ヶ崎の鎌倉古道〕茅ヶ崎市西方下町屋より東方小和田まで旧東海道(国道1号)の北を東西に貫く道を鎌倉古道と呼んでいる。(80)古橋脚のある場所より国道を横切り梅雲寺の横を過ぎ、鶴峯八幡宮参道を横切る。(U)懷島氏の墓地のある竜泉院の南の浜之郷の登象や矢畑の蔵屋敷の地を通り、北茅ヶ崎駅(相模線)南の踏切りに至る古道は、現在、宅造や工場建設で消滅に近い。これより本村の海前寺、茅ヶ崎高校の北裏を過ぎると、松林中学前付近より道はほとんど一直線である。(V)綱久保は湧水地で、戦時中松根発掘作業の人々は古井を使用したという。また、中学建設のため道路も拡張されたとのことである。(81)熊野神社の裏を過ぎ、上正寺に至る。同寺には北朝年号の康永2年(1343)の板碑があり、(82)寺号は、住僧了智が嘉禄(1225~26)年中、親鸞に帰依し、「無上正覚寺」と名をさづけられたに始まると伝える。(83)

(7) 藤沢市辻堂より鎌倉市極楽寺まで

〔辻堂地区〕茅ヶ崎市小和田の上正寺東方より辻堂に至る道を、山口金次氏は、「これより少し東へ進み国道を横切って、辻堂駅西側の国鉄の踏切を過ぎる、辻堂である」(84)と

記されるが、藤沢市史では、「藤沢市二ツ谷から、東海道を横断し方向を東南にとり、西神台から「初タラ」「土打」の境をぬけて、辻堂駅東の踏切りを通り、仲町、後山、堂面（辻堂元町3、太平台1）に出る」と記す。この道筋の南側に宝泉寺の真言道場、北方に宝珠寺（開山の元朝は元暦3年（1186）寂<sup>(85)</sup>）があり、二ツ谷からここまでの道を、「光明真言道」と呼ぶ。これより田畑明神の前を通るが<sup>(w)</sup>此付近は、八松原<sup>やまつばら</sup>に開かれた集落の中心であった。<sup>(86)</sup>

〔鶴沼、片瀬地区〕堂面より東に引地川を藤原、八部（鶴沼海岸六丁目）<sup>(87)</sup>付近で渡れば、片瀬川（境川）西岸の鶴沼の砂丘地帯に入るが、この地域が、源平盛衰記、平家物語、海道記等にみえる「砥上原<sup>とがみ</sup>」であろう。

境川の旧河道が屈曲する地に「川袋」の地名があり、この地は片瀬村に属し、「片瀬原」とも呼んだ。この付近に明治10年頃まで「砥上の渡し」があった。<sup>(88)</sup>これより東方の東京螺子工場の南、片瀬大源太の地に至り、丘陵西麓を境川沿いに、宮畑、鯨骨、竜ノ口を経て、腰越駅に達したと推定される。鯨骨には、一遍聖絵にみる片瀬地藏堂の址、<sup>(89)</sup>竜口寺前は、日蓮<sup>(90)</sup>蒙古使節<sup>(91)</sup>で知られる刑場址とされ、腰越の満福寺は、義経逗留<sup>(92)</sup>の地と伝える。<sup>(93)</sup>

#### 〔稲村崎と極楽寺坂〕

鎌倉の極楽寺切通開通以前は、稲村崎を迂回する道が利用された。建長4年（1252）4月1日、宗尊親王関東下向の行列は、稲村崎の路より鎌倉に入った。<sup>(94)</sup>この切通の着工は、正元元年（1259）北条重時が極楽寺の建設を忍性に命じた<sup>(95)</sup>ころであろう。弘長元年（1261）4月4日、將軍宗尊親王が重時の極楽寺新造山荘に渡御<sup>(96)</sup>の時にはこの坂が竣工していたと考えられる。<sup>(97)</sup>稲村崎の道について、元弘3年（1333）5月、新田義貞鎌倉討入当時の状況を考え調査された大森金五郎氏は、「道路は崖上にあったか、崖下にあったかは疑問であるが、梅松論に『稲村崎浪打際石高道細く』太平記に『沙頭路狭きに、浪打際まで逆茂木を稠く引懸て』などの記事から、多分崖下の海辺に近い所に通路があったのであろう」と記される。<sup>(98)</sup>現在の極楽寺切通の崖上にある成就院は、承久元年（1219）北条泰時の創建と伝えるが<sup>(99)</sup>当時はその門前を通過した高さにあった。<sup>(100)</sup>

以上「京鎌倉往還」は、鎌倉の大手、極楽寺口で終わるのである。

この中世の東海道、京都・鎌倉間の往還は、二大政治の中心地を結び、また鎮西（九州）にも通じたから、幕府の公用関係の街道として、他の鎌倉街道に優先した性格を持っていたのである。即ち、幕府と朝廷、幕府の設置した京都の六波羅府との使者の往還、特に、鎌倉飛脚（または六波羅飛脚）が利用する火急に備えた早馬が宿駅に常備された<sup>(101)</sup>また將軍の上洛、京都の御物の運送、鎌倉の仏事供養のため京都からの導師の下向などがあり東国御家人は、鎌倉大番役の他、京都大番役の勤務も課せられていた。<sup>(102)</sup>

## あ と が き

鎌倉時代の東国とは、相模、武蔵、下総、安房、常陸、上野、下野、信濃、甲斐、伊豆、駿河、遠江、陸奥、出羽の15ヶ国であった。これらの地方の武士たちは、鎌倉御家人として、將軍御所の警備を交代で、1年または数年ごとに勤める任務を命ぜられていた。これ

を「鎌倉大番役」と呼ばれた。(103) 関東、中部地方に鎌倉街道の称呼が多くみられるのはこれら東国武士の「鎌倉往還」として発生したものであろう。奥羽地方については、未だ調査をしていないが、岩手県紫波町(日詰)南方の古街道(犬渕の西に僅かに残存)を、地元では「鎌倉街道」(または「あづま道」)と呼んでいる事を知った。(104)

室町時代となっても、鎌倉には足利氏の一族による鎌倉御所(公方)や、関東管領の上杉氏の屋敷が置かれたから、鎌倉街道の重要性は減びなかった。現在残る街道の遺跡や称呼は、(特に関東地方では)この時代に利用され、また改修されたものがかなり多いのではないかと考えられる。しかし、いづれも鎌倉に向う中世の道であることには変りない。相風、武風は、近世の鎌倉道と区別して、「鎌倉古街道」と称している。

鎌倉街道の遺跡と称されるものは、直線状で、国境や村境となる丘陵の尾根道(所によっては山腹)が選ばれ、その形状は堀切道となり、平野や台地では高土手を築き、また坂道は薬研状を呈していることが諸所にみられる。(105)

鎌倉街道の遺跡の調査は、当時の工事記録に関する1等史料が殆んど皆無であり、またその発掘調査も行われていない現状であるから、堀切道があったとしても、いつどのように手を加えられているかもまた不明である。その路線についても、先に述べた如く推定路であるといえる。さらに、それも近年の宅造や新道、鉄路などの建設により、古道は次々と消滅して居り、愈々「まぼろしの道」となっていくのである。

本稿は、神奈川県立博物館の研究調査費によるものである。

稿了に当り、調査に対しご教示、ご協力を賜った各位に対し厚く御礼申上げる次第である。

## 注 〔二〕

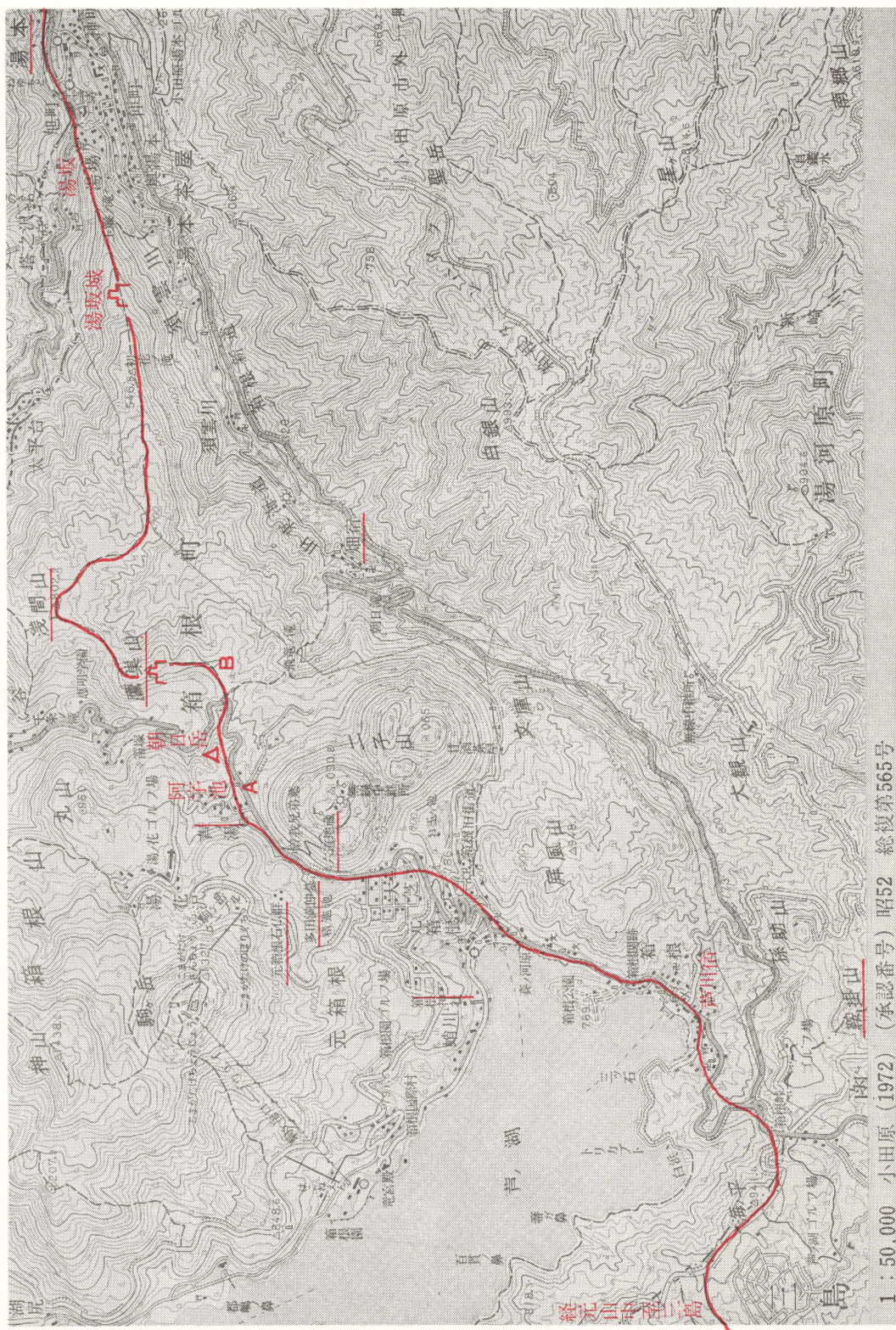
- 1 「吾妻鏡」(吉川本 国書刊行会 1915. 新訂増補 国史大系 吉川弘文館 1968. 以下同) 文治元年11月29日条
- 2 新城常三「鎌倉時代の交通」(日本歴史叢書18 吉川弘文館 1967)
- 3 「大乘院記録」(古事類苑 地部37 道路, 神宮司庁 1913)
- 4 ① 森文書「北条氏虎印判状」(藤沢市史1 資料編 1970) 弘治元年(1555)12月23日  
② 相田二郎「中世の関所」(歟傍書房 1943) 戦国時代に於ける東国地方の宿、問屋、伝馬。
- 5 服部清道「ゆかりの里」(藤沢の歴史, 藤沢の歴史編集委員会 1966) P.32
- 6 関 靖編「新訂増補 関東往還記」(金沢文庫 1939)
- 7 飛鳥井雅有「春能深山路」(続群書類従巻 522) 弘安3年(1280)
- 8 飯尾宗祇(1421~1502) 応永28~文亀2 編
- 9 「新編相模国風土記稿」(大日本地誌大系雄山閣 1972) 巻27 足柄下郡箱根宿) 以下(相風)と略す
- 10 円覚寺文書「鎌倉御所氏満御教書」「関東管領上杉憲方奉書」康暦2年(1380)6月8日 鎌倉市史史料篇 2. (1956)

- 11 「東関紀行」(日本古典全書 朝日新聞 1951) 仁治3年(1242)
- 12 坂詰秀一「芦ノ湯の旧石器時代遺跡」(箱根町誌1 角川 1967)
- 13 奥田直栄「箱根の中世城郭について上」(箱根町誌2 角川 1971)
- 14 同 上
- 15 阿仏尼「十六夜日記」(日本古典全書 朝日, 1951) 建治3年(1277)
- 16 「吾妻鏡」治承4年(1180)8月24日条
- 17 「妙本寺本曾我物語」(貴重古典籍叢刊3 角川 1969) 巻7, 巻10
- 18 平亡文書「北条氏虎印判状」(静岡県史料1—19) 天正9年(1581)8月15日
- 19 足柄下郡文書(箱根畑宿)(改訂新編相州古文書1 神奈川県教育委員会 1965)  
「北条氏印判状」弘治2年(1556)3月19日
- 20 前掲 11
- 21 准后道興「廻国雜記」(郡書類従巻 337) 文明18年(1486)
- 22 「平安紀行」(郡書類従巻 339) 文明10年
- 23 板碑銘 文保元年(1317)。元亨2年(1322)
- 24 (相風)巻24 足柄下郡小田原宿上条
- 25 ① 伝元弘3年(1333)建立 元潮音寺境内  
② 「太平記」(日本古典文学大系 岩波 1960) 巻3  
平成輔は笠置落城の時に捕えられ、翌、元弘2年(1332)5月22日、鎌倉護送の途中、  
早川尻で殺された。
- 26 ① 「雲頂庵文書」(鎌倉市史料篇2,)「鎌倉御所基氏御教書」康安元年11月26日  
② 前掲 25—②「太平記」巻36 其 他
- 27 「鎌倉大草紙」(郡書類従巻 382)
- 28 福田以久生「禅秀の乱前後の相模一大森氏研究序説一」(小田原地方史研究7, 小田原  
地方史研究会 1975)
- 29 鶴岡八幡宮文書(鎌倉市史料1)「鎌倉御所足利持氏御教書」永享4年10月14日
- 30 鶴岡神主大伴氏所蔵文書(相風 巻27, 湯本村条)
- 31 「小田原市史料上 歴史篇」1967 (鎌倉室町時代の小田原の変遷)
- 32 ① 「源平盛衰記」(通俗日本全史3 早稲田大学 1912)巻21  
② 福田以久生「治承4年の反乱と柳下郷」(小田原地方史研究5, 1973)
- 33 ① (相風)巻36, 足柄下郡酒匂村条  
② 上記①で、「御所蹟」は、八幡宮前の俗称「<sup>かわらやしき</sup>瓦屋敷」の地とある。この名は現在も、  
酒匂神社南方に残る(上輩寺六郷夫人談), 酒匂では酒匂神社の事を八幡様とも云、  
(法船寺和田夫人談)これは、旧八幡宮を酒匂神社内に合祀したため、例祭旧八幡宮  
の祭日と同じ7月7日であったが、現在は、4月8日である。(松原神社村上宮司談)  
小字「はんべ」は、①に八幡宮南方の東海道を指すとあり、浜部のなまりとし、その横  
町に「御所小路」の名があると記している。
- 34 「日蓮注画賛」(郡書類従巻 220) (続九上)
- 35 前掲 33 法船寺(小田原市酒匂2—35)
- 36 ① 「吾妻鏡」建久3年(1192)8月9日条  
② (前掲 33, 酒匂村)
- 37 上輩寺(酒匂2 南蔵寺南隣)六郷夫人談。同寺に酒匂右馬允の墓(太郎か)あり、
- 38 前掲36同条 賀茂(加茂神社)柳下

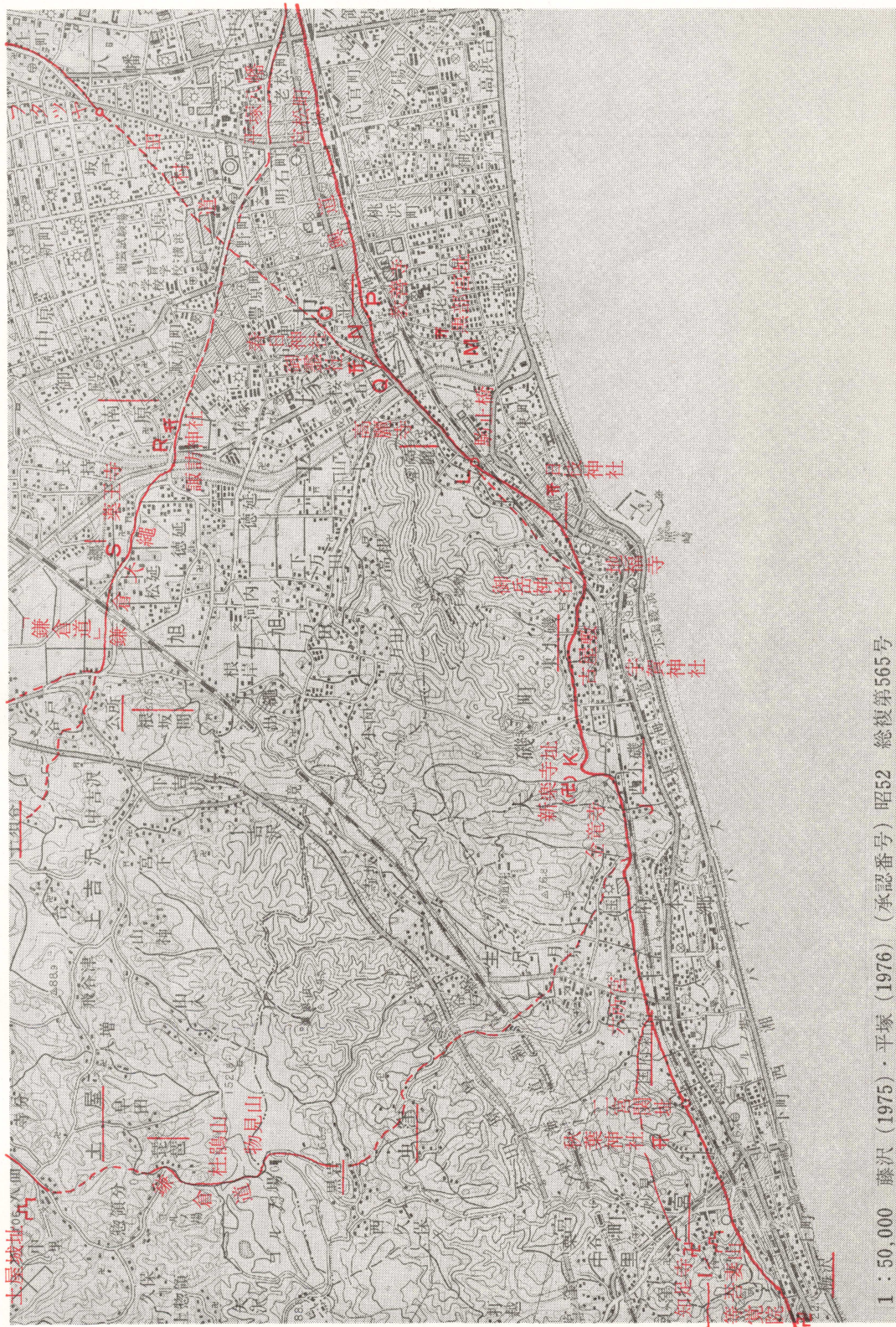
- 39 ① 「鶴岡八幡宮文書」（鎌倉市史料1）「関東御教書」建長元年（1249）6月3日  
 ② （相風）足柄下郡桑原村浄蓮寺，〔桑原道場。開山乗願 応安3年（1370）寂〕  
 ③ 前掲 28 福田氏論稿「桑原郷」など参照
- 40 円覚寺仏日庵文書（鎌倉市史料編3）「関東下知状」文応元年（1260）9月19日（成田庄飯泉郷）
- 41 （相風）巻35飯田岡村小字若宮小路〔文和中（1352～56）八幡宮を洪水のため堀ノ内村に移す〕
- 42 ① 長泉院（南足柄市塚原）にて，前田慧伊住職より，大森氏と岩原城について聴取，同寺蔵 岩原古城図など閲覧  
 ② （相風）巻18 岩原村条  
 ③ 西ヶ谷恭弘「神奈川の城 上」（朝日新聞横浜支局 1972） 岩原城
- 43 中野敬次郎「箱根山の古道と中世以降の箱根の発展」（箱根町誌1）「奈良平安時代の足柄道」（同上）足柄の坂の神である。現在，荏野の北方丘陵にあるが，昔は矢倉沢に，足柄明神として祀られた。
- 44 直良信夫「峠路」（校倉書房 1961）「東海道筋 足柄峠」
- 45 「海道記」（前掲15）貞応2年
- 46 市村咸人「御坂越の今昔」（伊那史叢説1 信濃郷土出版社 1935）  
 「甲斐国志」巻1（大日本地誌大系 雄山閣 1968）
- 47 （相風）巻40 山西村
- 48 実応「<sup>うめざわ</sup>樺沢志」（二宮郷土誌 1940） 文政8年（1825）梅沢村東光寺僧
- 49 （前掲48）二宮郷土誌
- 50 （前掲17）曾我物語巻6
- 51 「城前寺はもと，剣沢にのぞむ墓地の所にあった」（小田原市曾我原 佐宗和久氏談）
- 52 （前掲21）廻国雜記
- 53 （前掲1）吾妻鏡
- 54 石野瑛「中村庄司とその一族」（「神奈川県大観」4篇 武相学園 1956）
- 55 ① 竹見竜雄「中村郷」  
 ② （前掲42③）神奈川の城下（中村滞陣図）
- 56 大類伸監修「日本城郭全集4」（人物往来社 1967）神奈川県の城 曾我城
- 57 大磯，地福寺文書（前掲19）相州古文書1）「北条氏印判状」永禄2年（1559）8月18日
- 58 「神奈川県中郡勢誌」中地方事務所 1953
- 59 中郡大磯町西小磯金竜寺住職 向井英彦氏談
- 60 （相風）巻41 淘綾郡西小磯村金竜寺条
- 61 （同上）大磯宿条
- 62 「かながわの文化財めぐり」神奈川県文化財協会 1975
- 63 ① 「平塚の史跡と文化財めぐり」平塚市教育委員会 1969  
 ② 中村和伯「中世社会の展開と地域変貌—西相州を例として—」（歴史地理学紀要 2 日本歴史地理学研究会 1960）和田の乱当時に西相模の武士団が北条氏に抵抗した要因についての論稿がある。
- 64 高瀬慎吾「新平塚風土記稿」平塚市教育委員会 1970
- 65 同 上

- 66 ① 「<sup>さらしな</sup>更級日記」(群書類従巻 328)
- ② (前掲11) 東関紀行 他
- 67 (前掲64) 新平塚風土記稿
- 68 貝原益軒「吾嬬路記」〔柳枝軒 享保6年(1721)〕
- 69 (前掲64) 新平塚風土記稿
- 70 「義経記」(日本古典文学大系37 岩波 1959)
- 71 (前掲17) 曾我物語巻7, 同条角川源義氏考証
- 72 ① 「吾妻鏡」安貞2年(1228)7月22~25日条
- ② (前掲55②) 神奈川の城 下 田村城
- ③ 平塚市田村の小公園内に館址の碑あり
- 73 (前掲42) 神奈川の城 上 一之宮城(高座郡寒川町)
- 74 ① 平塚市教育委員会 大木伸男氏談
- ② 「図録 目で見る平塚市」 平塚市教育委員会 1972
- ③ (前掲64) 新平塚風土記稿
- 75 金子文書「源頼朝下文」(神奈川県立博物館所蔵 鎌倉市史史料1)
- 76 「大野誌」平塚市教育委員会 1958
- 77 (前掲74①) 大木伸男氏談
- 78 「吾妻鏡」建久元年11月29日条
- 79 石野瑛「武相考古」(閑話叢書 5, 坂本書店 1926)
- 石野瑛「神奈川大観3」
- 80 山口金次「鎌倉古道と茅ヶ崎の板碑」(郷土茅ヶ崎 下 茅ヶ崎市教育委員会 1973)
- 81 茅ヶ崎市菱沼綱久保旧家, 佐藤満蔵氏談
- 82 (前掲80) 山口金次 (板碑年表)
- 83 (相風)巻60 高座郡小和田村条
- 84 (前掲80)
- 85 (相風)巻60 高座郡辻堂村 宝珠寺(八松山明王院)
- 86 「藤沢市史4(通央篇)」 1972
- 第3章第4節藤沢地域の開発
- 87 (同上) P.570「藤原および八部からは, 鎌倉時代の開拓遺跡が発見されている」
- 88 阿部正道「鎌倉の古道」(鎌倉国宝館論集2 鎌倉市教育委員会 1958)
- 89 「六条録起」6. 続群書類従(9上 P.174)に, 「片瀬浜の地藏堂」弘安5年(1282)3月より7月まで寓居と記す。
- 伝地藏堂址 藤沢市片瀬3丁目7
- 90 (前掲34)「日蓮註画讃」巻3 竜口頸座難。 文永8年(1271)9月12日
- 91 ① 「北条九代記 下」(続群書類従 29上 P.426 巻855)
- ② 「保暦間記」第4(群書類従 20—P.165)建治元年(1275)9月7日 元使を斬る
- 92 「吾妻鏡」元暦2年(1185)5月24日条
- 93 腰越駅, 固瀬宿に関する史書, 伝承は多いが, 今回は省略し, 下記主要参考文献を記すに止める。
- ① 呉文炳「腰越考」厳松堂 1937
- ② 呉文炳「江島考」書物展望社 1941

- 94 「吾妻鏡」建長4年4月1日条
- 95 「鎌倉市史 社寺篇」真言律宗寺院 極楽寺
- 96 「吾妻鏡」弘長元年4月4日条
- 97 (前掲88) 鎌倉の古道 P. 32
- 98 大森金五郎「かまくら」(日本歴史地理学会 1925) P. 296
- 99 (前掲95) 真言宗寺院 成就院
- 100 「鎌倉市史 考古篇」P. 177 (極楽寺切通)
- 101 「吾妻鏡」弘長元年2月25日条
- 102 ① 服部清道「徒歩旅行者の歴史学」(牧書房 1944) P. 36  
② 新城常三「鎌倉時代の交通」(日本歴史叢書18 吉川弘文館 1967) P. 263~266
- 103 五味克夫「鎌倉御家人の番役勤仕について」(史学雑誌 63-10) P. 22~25
- 104 山田安彦「陸奥の古代交通路研究に関する二つの問題」(歴史地理学紀要 16, 歴史地理学会 1974) P. 29
- 105 阿部正道「鎌倉街道について—その分布と遺跡—」(人文地理学の諸問題 大明堂 1968) P. 18





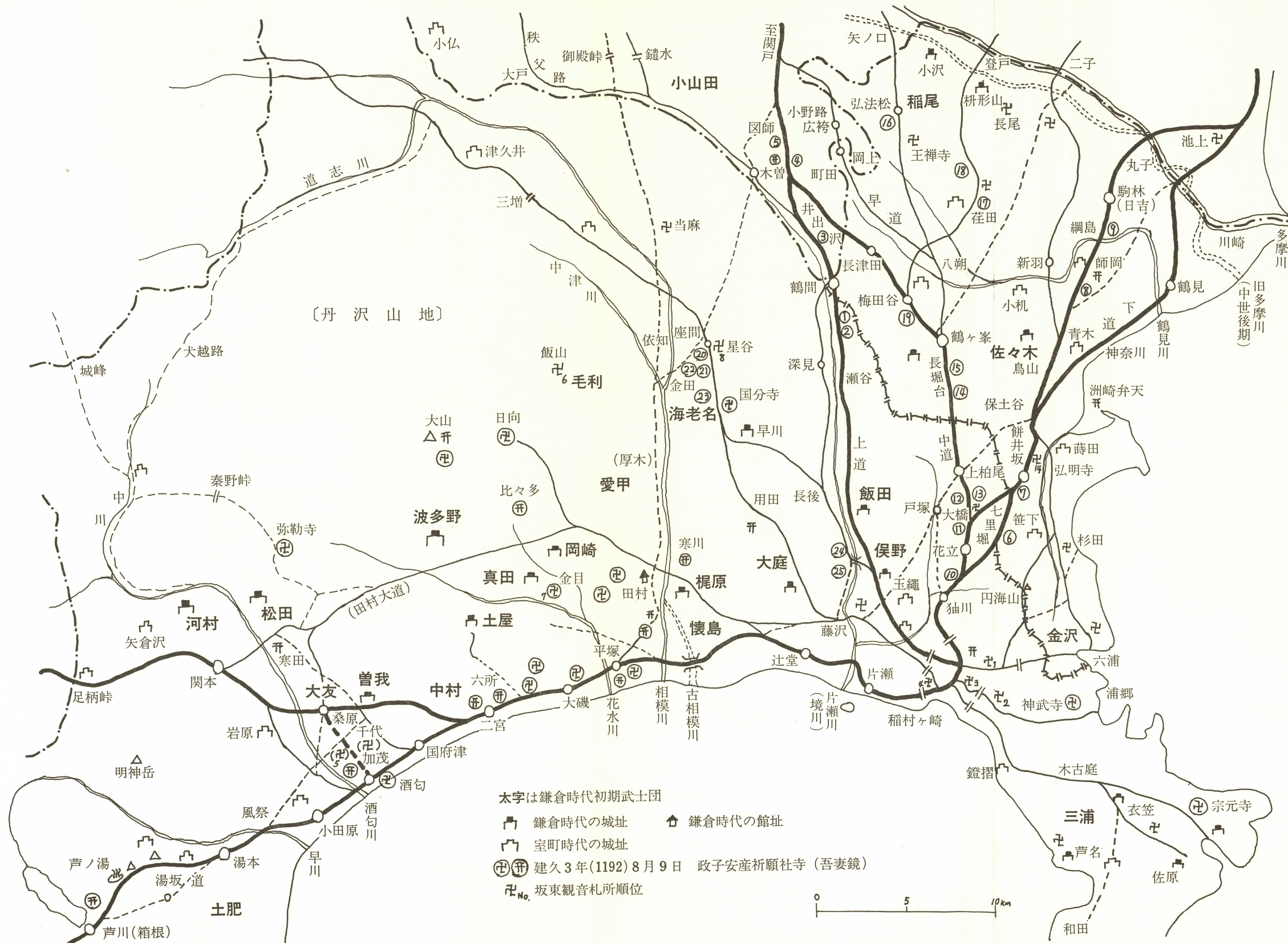




1 : 50,000 藤沢 (1975)・平塚 (1976) (承認番号) 昭52 総複第565号



# 中世鎌倉街道関係図



写真解説 (一) A～Y (5万分の1地形図に記入)



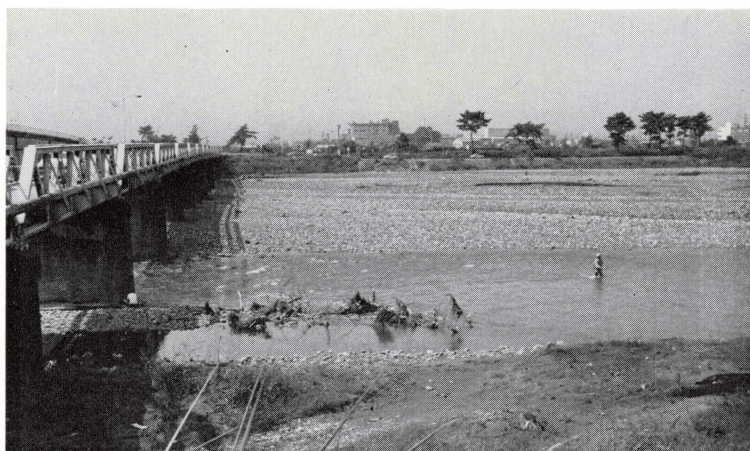
A. 芦ノ湯「阿字池弁天」前より朝日岳を望む。右方の鞍部を「鎌倉街道」が通過する。



B. 芦ノ湯より鷹ノ巣山に向う尾根道(湯坂道)。(1972年8月14日写)



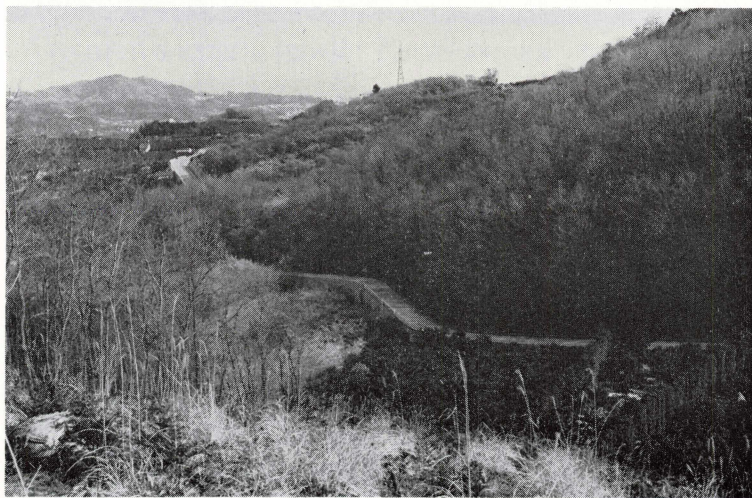
C. 岩原城本丸跡(大森氏頼墓)より矢倉岳(足柄道)の遠望。



D. 酒匂川の富士見橋より桑原を望む。(1975年10月4日写)



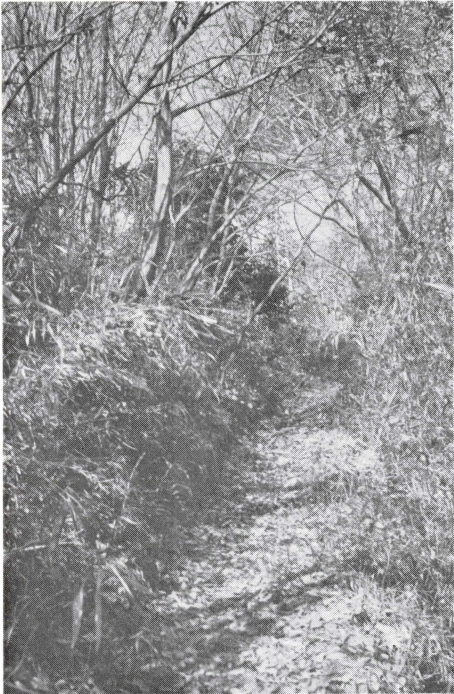
E. 六本松の跡と芭蕉の句碑。(1976年3月4日写)



F. 六本松の峠より中村川方面遠望。(沼代よりの足柄道)



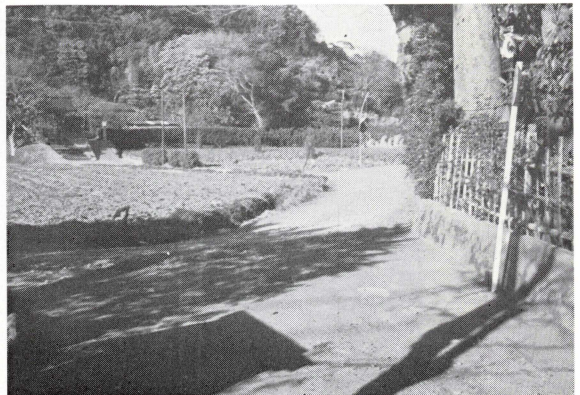
G. 川勾神社前。前方を古道が東西に横切る。(1975年12月25日写)



H. 川勾神社東方の山道。(釜野に向う古道)



I. 吾妻山北方より二宮町展望。前方丘陵、右端が知足寺。



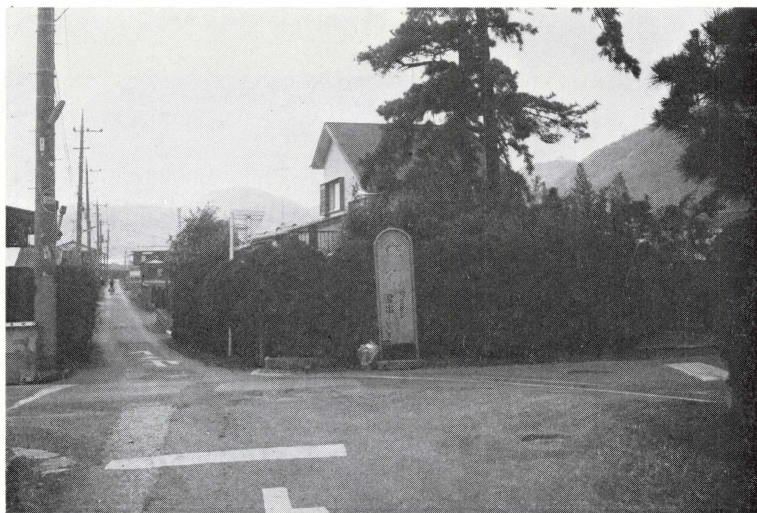
J. 金竜寺前の鎌倉古道。(西小磯)



K. 新楽寺跡。中央樹林左端に観音窟がある。



L. 大磯の化粧坂東口 駒止橋。(小溝あり)。(1976年1月22日写)



M. 平塚の十間坂(右方)下。黒部丘据の古海浜通り。正面は花水川。  
(1976年3月25日写)



N. 平塚本宿の春日神社。前方旧東海道。



O. 平塚の碑……平塚の地名のおこりとする。東隣の要法寺は、日蓮止宿地と伝える。



P. 教善寺横「<sup>こしみち</sup>興道」。



Q. 「シベの木下道」 古奥州古道。(ここより右に折れ、東北に進む)



R. 「鎌倉大縄」諏訪神社(右)前より南原土手(正面)に向う。



S. 薬王寺の古塔まとい(平塚市郷) 門前を鎌倉街道(鎌倉大縄)が通ずる。(1973年10月26日写)



T. 古相模川の橋脚（もと、水田であったが、池にして保存）。

（1971年 5 月 27 日 写）



U. 鶴峯八幡宮参道（松並木）東方。（茅ヶ崎の鎌倉古道）



V. 松林中学校前付近（遠景は旧東海道の松並木）の茅ヶ崎の古道。



W 田畑明神前の辻堂の古道。



X・Y. 藤沢市西富台の鎌倉街道。(御殿橋より藤嶺学園下を廻り、緑ヶ丘方面に通じる)



① 上瀬谷の鎌倉街道遺跡。中央竹林中。牢場坂（上瀬谷小西方）より。（1976年6月17日写）



② 上瀬谷の鎌倉街道遺跡。街道土手下の墓地（奥津家）内の板碑。



③ 町田市井出沢。菅原神社境内の湧水地。（右端）

※ 1…上道，2…下道，3…中道  
4…座間，海老名の鎌倉古道



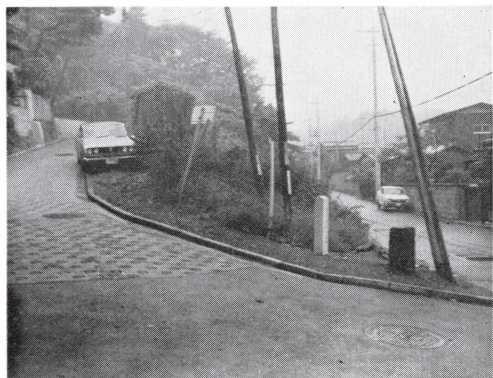
④ 七国山（町田市）の鎌倉井戸跡。



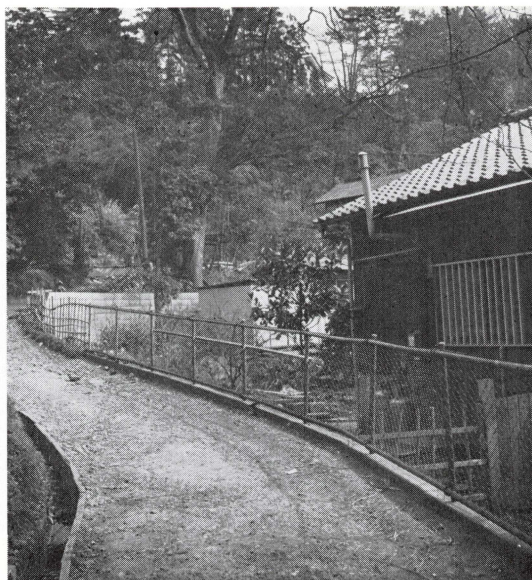
⑤ 同北方の薬研堀状坂道。



⑥ 「七里堀」古道の名残り。野庭団地で寸断。前方の道も翌年新道で消滅。  
(1974年10月24日写)



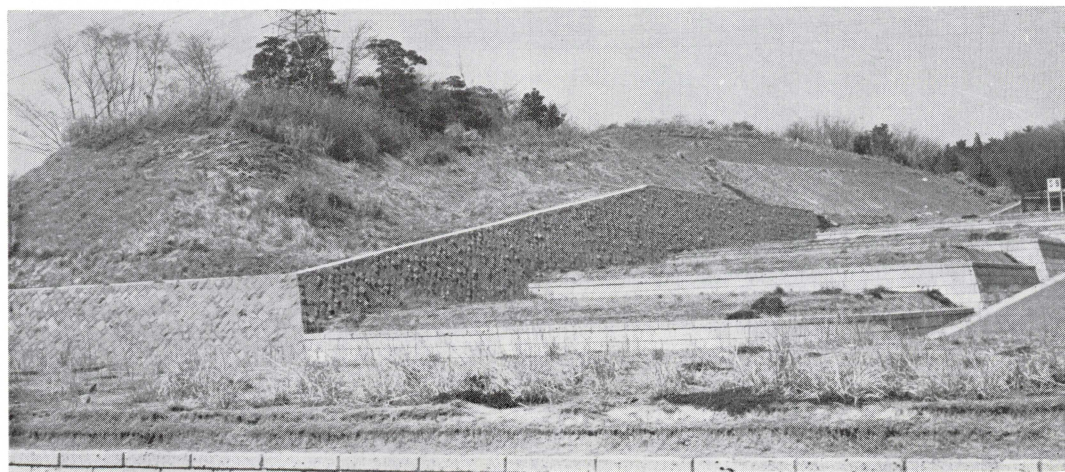
⑦ 「餅井坂」坂下。道標と道興の句を記す（木柱）。  
（港南区最戸）



⑧ 「ケード」(街道) 大倉山公園下の鎌倉古道。  
（港北区）



⑨ 鶴見川の綱島橋。（対岸＝橋場稲荷）



⑩ 「<sup>はななて</sup>花立の坂」の南方。もと薬研堀状であったが、宅造のため消滅。（正面石垣上）



⑪ 日限地藏堂裏の古道跡。(宅造による崖上)



⑫ 中道の古道。(老人ホーム裏)



⑬ 中道の古道。



⑭ 「長堀台」鶴ヶ峯方面より南方左近山団地（前面）を望む（古道の線は団地で寸断）。（1974年11月21日写）



⑮ 「長堀台」より鶴ヶ峯の丘を望む。



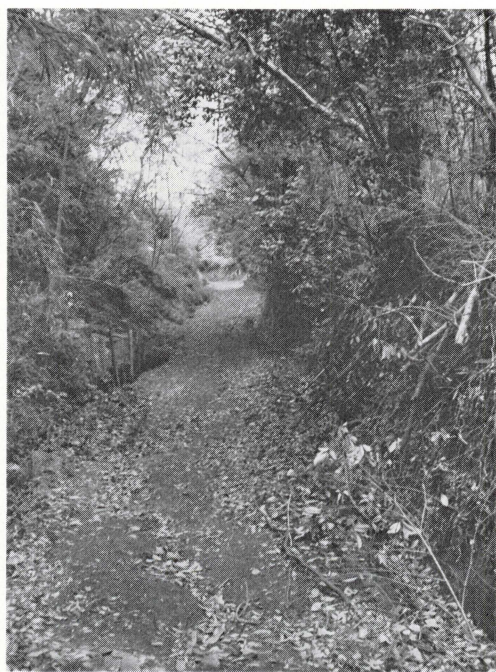
⑯ 「弘法松」の跡。中央石段上。



①⑨ 鶴ヶ峰丘陵西方の尾根の古道は、横浜市の汚水道工事で改修。左端水道路より分れ梅田谷（緑区）に向う古道。（右）



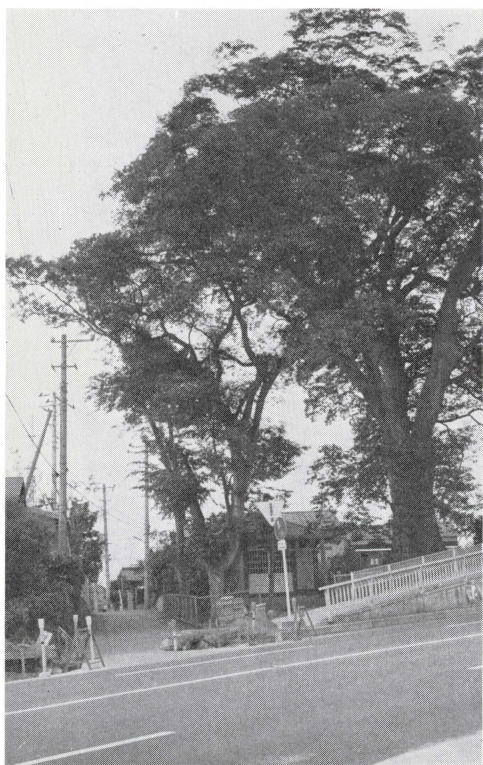
①⑦ 荏田眞福寺横の古道跡。（1973年4月20日写）



①⑧ 元石川町の台地に登る古道。（堀切状）



②② 「神井戸」(座間入谷皆原崖下の湧水)。  
(1975年10月10日写)



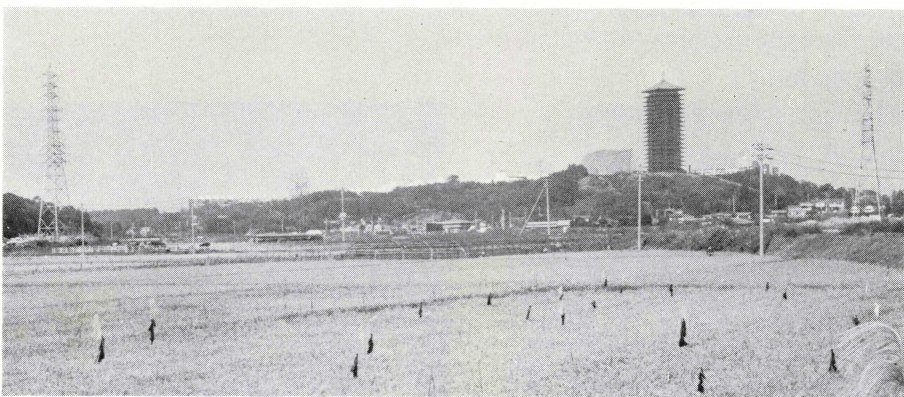
②① 座間の大ケヤキ。(樹下は護王姫祠)  
古道筋は中央(新道で寸断)で、座間キャン  
プ中央を通りここに出る。  
(1975年10月23日写)



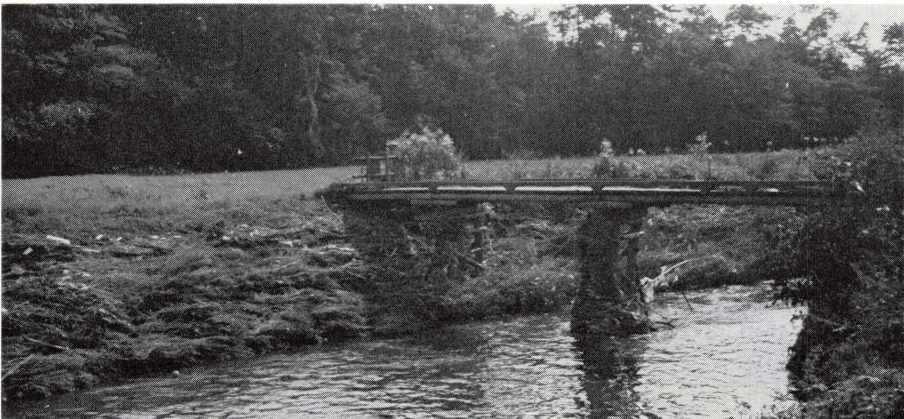
②① 神井戸崖上の「鎌倉街道」。



②③ 秋葉山丘陵の鎌倉古道（海老名市上今泉）。（1976年4月8日写）



②④ 「道場河原」藤沢市西俣野の古道筋。この付近は、時宗の道場があったと伝える。境川の堤を越え、正面（俣野町）は、上道が通っている。（1975年10月10日写）



②⑤ 「金沢橋」(境川対岸は東俣野町) 一遍が長後より鎌倉に向けた道筋の一つとしてあげられている。